

次田潤著

國文學史新濤

明治書院發行

昭和七年九月二十日印刷
昭和七年九月二十五日發行
昭和十七年十一月十三日版發行

國文學史新講上卷

定價金參圓五拾錢

著者 次田 潤
東京市豐島區池袋三丁目一五三九番地

發行者 三 樹 彰
東京市神田區錦町二丁目十六番地

印刷者 井上 源 丞
東京市下谷區二長町一番地

印刷所 凸版印刷株式會社
東京市下谷區二長町一番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替貯金口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田 (25)
三三三
四四四
九八七
番番番



配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

自序

從來公にせられた國文學史の組織は多種多様であります。これを類別しますと、作者の傳記や作品の解説などを主とするものと、文藝思潮の發展を中心とするものと、文學の評論に重きを置くものと、此の三種になるやうであります。此の外になほ、國文學の本質若しくは國民獨得の文藝觀に基づいて、新しく體系を立てようとする學者がおりますが、まだ纏まつた著述を見るまでに至つてゐません。記述の態度を異にする此等の國文學史には、それぞれ長所があるのは勿論であります。が、通史としては各の特長を折衷するのも一方法であらうと思ひます。

本書は國文學通史でありますから、新奇を求めず、専ら穩健を期したのであります。まして、組織の如きは、大體在來の書史的文學史の例に倣ひましたが、記述には、其他の様式態度を參酌し、且つ内容の充實を圖つたのであります。試みに執筆

に當つて樹てました大體方針を箇條書にして見ますと、次の通りであります。

一 各時代竝に各種文學の間に輕重の差を置かず、なるべく平等に取扱ふ事。
 一 國民の文學的生活の全局面を明かにする爲に、漢文學、國學、歌學、評論等の發達をも記述する事。

一 各種文學の本質を明かにし、又それぞれの文學と密接な關係を有する藝術の發生事情、竝に其の發達を略述する事。

一 文藝思潮の推移、各作家作品の相互の史的關係、竝に其の價值の闡明に努める事。

一 時代を代表する作家作品、及び從來の國文學史に閑却せられてゐる文藝に關しては、特に稍詳密に解説する事。

一 最近學者によつて究明せられた著しい事項、及び新たに發見せられた資料の紹介に努める事。

斯かる主義方針のもとに筆を執りましたけれども、豫期の如き結果を收め得な

かつた點が決して尠くありません。

國文學史は著者の獨創的な史的考察によつて、特色を發揮すべきは勿論であります。が從來現れた諸研究の成果を集成して、記述の嚴正精確を期する事は、更に肝要であると思ひます。従つて本書には、自信のない未定見の發表は一切差控へましたが、權威ある學者の意見はなるべく廣く之を紹介し、且つ批判を試みました。尤も本書は多忙な教務の餘暇に成つたものでありますから、遺漏や失考が尠くなく、と思ひます。又近來國文學の研究は空前の盛況を呈して居りますから、今後本書の記載に修正を要するやうな新説や新資料が續々現れるに相違ありません。此等に對しては、將來適當な方法によつて、増補訂正を施して行くつもりであります。

本書は曩に公にしました祝詞新講と共に、學習院に教鞭を執つてゐる間に成つたのであります。自分にとつては思出の多い記念の著述であります。此の間に帝室御物の祕本を拜觀する光榮を得たのを始として、宮内省圖書寮、高松宮

家御文庫・前田侯爵家尊經閣三條西伯爵家文庫、其の他諸家の珍籍を拜見して多大の便益を得ました事は、此の上もない幸福であります。執筆中諸學者の著書や論文から多大の裨益を得た事は勿論でありますが、前には故福原前學習院長、後には荒木院長から屢激勵の言葉を頂き、前田侯爵家育徳財團からは、貴重な尊經閣叢刊を寄贈せられ、又同學の先輩知友からは種々の援助を蒙りました。本書が拙劣ながらも完成を告げましたのは、此等の方々の庇護による所が多いのであります。茲に謹んで感謝の意を表します。

本書の題簽は入江皇太后宮大夫が特に揮毫して下さつたのであり、裝幀は萩生天泉畫伯を煩はしたのであります。共に拙著に一大光彩をお添へ下さつた事を深く感謝いたします。

昭和七年九月五日

著者

五衣人莫若曾綢
為難波壯士乃手尔者歌弱

わさしなむとふくひきまをてあはれにうたへり

よりかなこゝろ花もたふそるるるらん

大津宿祢三依悲別歌一首

大律篇稱三依悲別歌一首

ち地と水久位は余が余る有師家之庭羽裳
あめつちとくしうきんくろふしむ

花あいらず

余明軍典大律
刑部家詩歌二首

明主者大納之
卿之資人也

奉旨而求时太尔不更者如年月所念

もあつた
いまだ
なま
なま
なま

二
子
七
十
三
の
三

國文學史新講目次

序 說

第一篇 大和時代

第一章 時代の概観

一 傳誦文學時代

二 記載文學時代

第二章 神話及び傳説

一 神話傳説の集成

二 古 事 記

三 日 本 書 紀

四 風土記と氏文

第三章 上古の歌謠と萬葉集

一 記紀の歌謠

二 萬葉集

五五

三 萬葉時代の歌人

六七

四 奈良朝の歌謠

八五

第四章 祝詞と宣命

八九

一 祝詞

八九

二 宣命

九七

第五章 漢文學と佛教說話

一〇三

一 漢文學

一〇三

二 佛教說話

一〇九

第二篇 平安時代前期

第一章 時代の概観

一一三

第二章 前期の漢文學

一二四

一 弘仁期の漢文學

一二四

二 弘仁時代の詩人

一三〇

三 貞觀と慶長の詩文

一三六

四 天曆時代の詩文

第三章 和歌の興隆

一 古今集以前

二 古今集時代

三 後撰集時代

四 歌合の發達

第四章 神樂と催馬樂

第五章 物語の發達

一 物語の種類

二 歌物語

三 作り物語

第六章 日記文學

第三篇 平安時代後期

第一章 時代の概観

第二章 後期の和歌

目

次

一三九

一四三

一四三

一五四

一六五

一七二

一八一

一八七

一八七

一八九

一九七

二〇八

二一八

二一八

二二八

三

一 前代繼承期

二二八

二 保守改新對立期

二三九

三 歌壇統一期

二五三

第三章 朗詠和讃雜藝

二六三

第四章 物語の隆盛

二七一

一 源氏物語

二七一

二 源氏物語以後

二八七

第五章 隨筆及び日記

三〇一

一 枕草子

三〇一

二 女流日記

三〇九

第六章 歴史物語と説話文學

三一八

一 歴史物語

三一八

二 説話文學

三四〇

第七章 後期の漢文學

三四七

第四篇 鎌倉時代

第一章	時代の概観	三五三
第二章	和歌の變遷	三六一
一	新古今時代	三六一
二	二條京極反目時代	三八三
第三章	宴曲と和讃	三九五
第四章	歴史物語と戦記物語	四〇一
一	歴史物語	四〇一
二	戦記物語	四〇四
第五章	擬古物語	四一六
第六章	説話文學	四二七
一	世俗説話	四二七
二	佛教説話	四三五
第七章	隨筆日記紀行	四四一
第八章	漢文學の衰頹	四五一

圖 版 目 次

目 次

卷 頭 圖 版

桂本萬葉集(御物)

源氏物語繪卷(德川尾州家藏)

平治物語繪卷(岩崎家藏)

後鳥羽天皇宸翰御製色紙(御物)

入 圖 版

唐招提寺講堂

古 事 記(眞福寺本)

日 本 書 紀(岩崎家本)

播磨風土記(三條西家藏)

藍紙本萬葉集(原氏藏)

琴 歌 譜(近衛家藏)

延喜式祝詞(九條家藏)

日本靈異記(前田家本)

平安神宮

神 泉 苑

凌 雲 集

空海筆風信狀

傳貫之筆古今集(山内家藏)

亭子院歌台(木村氏藏)

天治本催馬樂抄(御物)

傳良經筆伊勢物語(守屋氏藏)

傳定家筆伊勢物語(三條西家藏)

爲家筆大和物語(前田家藏)

宇津保物語(同右)

定家筆土佐日記(同右)

貴族管絃圖

拾 遺 集(三條西公條筆寫本)

俊成筆千載集切

傳行成筆和漢朗詠集(御物)

河内本源氏物語(德川尾州家本)

狹衣物語(深川氏藏)

濱松中納言物語(尾上博士藏)

堤中納言物語(高松宮御文庫本)

枕草子繪卷(淺野家藏)

枕 草 子(前田家藏)

紫式部日記繪卷(藤田家藏)

定家筆更級日記(御物)

榮華物語語(三條西家本)

大 鏡(千葉氏本)

傳爲家筆今鏡

隱岐本新古今集(鳥丸本)

定家筆懷紙

定家傳本金槐集與書

早歌うたひ

宴 曲 集

平治物語語

平家物語語(高野博士藏)

琵琶法師

住吉物語繪卷(福岡家藏)

著 の 衣

宇治拾遺物語繪卷(近衛家藏)

唐 鏡(神宮文庫藏)

大福光寺本方丈記

異本方丈記(吉澤博士藏)

金澤文庫印

國文學史新講

次田潤著

序 說

國文學史

國文學史は太古から現代に至る、國民の文學的生活の變遷發達の跡を研究するものであつて、日本文化史の一分科である。而して國文學史上には、國民思潮の流に棹さす歷代文學の史的發展の眞相を記述するは勿論、各種文學の推移の狀態、各作家竝に作品の相互の關係、及び作品の史的價值などを明かにし、なほ進んでは、國文學展開の理法を究明して、將來起るべき國民文學への指針となるべき知識をも、與へようとするのである。

國文學史の
種類

國史に一般史即ち通史と特別史とがあるやうに、國文學史にも此の二種類がある。即ち太古から現代に至るまでの、國文學全體の史的發展の跡を記述するものは國文學通史であり、其の一部分に就いて、特に精細な考察を下すものは特別史である。特別史には種々のものがある。例へば一時代の國文

學の特質及び發達を記すものは、各時代國文學史上代國文學史・平安時代國文學史・近世國文學史・明治文學史の如きであり、各種の國文學中の一を取つて、其の發達を考察するものは、和歌史・俳諧史・小説史・淨瑠璃史などの如き種別史である。此の外作家を中心として記述するものは列傳體文學史であり、國文學の形態の展開を研究するものは國文學形態史であり、又國文學の思想の推移を記述するものは國文學思潮史である。而して此等の特別史の様式は、之を通史にも應用することが出来るのであるから、通史の様式にも種々のものがある。例へば國文學の種別によつて、各種の文學の展開を別々に記述するものがあり、又國文學の形態上の發展の方面から、國文學全體の史的發達の經過を記す事も出来るのである。併し普通に行はれて居るのは、國文學の思潮の推移を中軸として、各種の文學の展開を考察するものであつて、本書も亦その様式によつて居るのである。以下其の研究方法的の概要を述べよう。

國文學史の研究法

文學は作家の藝術的創造力の產物であると共に、時代の文化現象の一であり、更に大きく觀るならば、流動して止まざる國民の精神生活の一產物である。従つて國文學史の研究は、各時代に現れた個々の作家並に作品に對して下した考察の結果を、國民の文學的思想の一體系のもとに、綜合し統一する事によつて完成するのである。換言すれば、一作品は其の作家の全作品中の一として考察し、一家の文學は其の時代の文學的思潮の一產物として研究し、更に一時代の文學は、其の背後に流れて居る上古以來流動し來つた、國民思潮の中に置いて研究して行くのである。かくて國文學史の研究は、先づ作品に對する考察から始まるのである。

（一）作品に對する考察　これには外面的考察と内面的考察とがある。本文批判（Text-criticism）本文の解釋、作品の解題・題號の由來、内容の組織・書物の體裁などの考察は、外面的考察であつて、これ等は内面的考察、即ち文學的批判の準備事業であり、また補助的事業である。しかして外面的考察の中で、國文學史の研究上最も重要なのは本文批判である。我が國文學は極めて長い歴史を有するのであるが、近世に至つて印刷事業が始まるまでは、轉寫によつて傳へられたのであるから、其の間に多種多様の異本を生じたのである。殊に時代の古い作品や、語物謠物の如く流動し易い性質を有する作品の中には、幾十種幾百種の異本を派生したものがあつた。又古い作品の中には、原本は既に遠き昔に散逸し、現存するものは後世の偽作であつたり、又未完成の原作の續篇を、後人が書き續いたものがあり、又原作に部分的に補綴改削を加へたものなどがある。かくて多種多様の異本を有する作品を、研究の對象とするに當つては、先づ異本の相違や移動の跡を系統的に考査すると共に、差違を生じた因縁を考究して之を原形に復するか、止むを得ざれば、原形に最も近いものを整定しなければならぬ。これを定本の整定といふ。本文批判と定本の整定とは、作品の語學的解釋と共に、國文學研究の根本的事業となるのである。

次に内面的考察は、作品に對して文學的批判を下すのであつて、是は作品の種類性質によつて、其の方法を異にするのは勿論であるが、一般には作品の素材・構想・表現等に互つて、分析的と綜合的との兩批判を下すのである。而して其の批判の態度には、鑑賞的批判と知識的批判とがある。鑑賞的批